島尾敏雄全集 第17巻

一九八三年一月二〇日初版

著者 島尾敏雄
発行者 株式会社晶文社
東京都千代田区外神田二-一一-一二
電話東京二五五局四五〇一(代表)・四五〇三(編集)
振替東京六-六二七九九
堀内印刷・美行製本
© 1983 Toshio Shimao
本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製(コピー)することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版社の権利の侵害となりますので、その場合には予め小社あて許諾を求めてください。
〈検印廃止〉落丁・乱丁本はお取替えいたします

島尾敏雄全集

第17巻

晶文社

ブックデザイン　平野甲賀

島尾敏雄全集第17巻・目次

奄美の秋色 13
奄美の昨今 17
「エラブの礁」のために 19
沖縄・先島の旅 22
来し方十年を顧みて 34
奄美・沖縄・本土 37
奄美と沖縄と 43
奄美——日本の南島 44
与論島にて 54
部落のかたち 55
名瀬の沖縄芝居 57

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

中学卒業生への或る感想 60
外国人の奄美研究家たち 62
沖縄紀行 65
テレビジョンのおそれ 86
奄美の墓のかたち 94
奄美のこころ 97
私の中の琉球弧 102
奄美を手がかりにした気ままな想念 106
奄美の春 109
琉球弧の視点から 112
私のオセアニア 115
大島のふしぎ 118
便利のおびえ 120
柳田国男著「海上の道」 122
盲点 128

偏倚 129
大城立裕氏芥川賞受賞の事 131
琉球弧を目の中に 137
テレビを考える 139
明日のおびえ 141
旧刊紹介 143
待遠しい「南島雑話」 145
「日本庶民生活史料集成」第一巻 145
明治百年と奄美 147
進一男詩集「海津抄」 164
私にとって沖縄とは何か 166
多くの可能性を秘めた島々 169
奄美は訴える 171
民族の活力 172
奄美・沖縄の個性の発掘 173

琉球弧から 182
初発のものへの羨望 192
回帰の想念・ヤポネシア 194
沖縄島の城跡 220
那覇に感ず 223
ヤポネシアと琉球弧 230
奄美・その孤独な広がり 243
琉球弧の覚めた目 246
琉球弧に新たな照明を 250
伝統と改革 251
「琉球弧」、改めて検討を 254
奄美の島から 256
金久正の事 259
旅立ちの決意 260
ヤポネシアの思想と文化の創造 262

琉球弧に住んで十六年　263
田中真人の事　276
沖縄をもっと知る必要　278
窪田繁の事　279
奄美に於ける平家伝説について　283
　永井彦熊氏への返事
「島尾敏雄非小説集成」第一巻　あとがき　286
恵原義盛の事　288
「島にて」第一号　編集後記　289
新川明の事　290
琉球弧の吸引的魅力　291
慶良間の睫　298
「奄美郷土研究会報」第十五号　編集後記　301
「島にて」第二号　編集後記　302
村山家国さんの死を悼む　303

鹿図協奄美支部会員を辞するに当たって　305
上平川蛇踊り　307
加計呂麻島呑之浦　317
「奄美の文化」編纂経緯　324
進一男「鶏鳴」帯文　329
藤井令一「シルエットの島」跋　330
「ヤポネシア序説」あとがき　334
「南島歌謡大成」推薦文　336
琉球文学事始め　337
「南島の夜は深々…」付記　339
「沖縄歴史人物大事典」推薦文　341
川満信一詩集略注　342
那覇日記　345
那覇に越冬す　360
那覇に仮寓して　364

那覇からの便り 368
長田須磨「奄美女性史」序文 378
新川明との出合い 380
琉球弧の感受 383
風の怯えと那覇への逃れ 401
初出一覧 407
*
島尾敏雄著書目録 413
島尾敏雄年譜 445

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

南島エッセイⅡ　1964—1978

奄美の秋色

奄美大島の名瀬に移り住んでやがて十年（昭和三十九年現在）になろうとするので、なにごとも当初感じたきわだった輪郭がぼやけてきた。来たばかりのときは、膚に感ずる空気が不安定で、気持の安らぐひまがなく、いつも胸のなかのノートのページを風に吹きちらされる思いがした。十月も終わりに近いころだったが、太陽はなお真夏のかがやきを失わず、山々の緑もおとろえがなく、蟬のような虫も鳴いていて、庭の草花は時期はずれに狂い咲き、本土のあの律義な四季の移りかわりになじんできた私は、いきなり季節の折り目をとりはらわれた世界にきて、気持も膚もどう構えてよいかに迷ったようであった。よほど注意して緊張をとだえさせないようにしないと、ほんのわずかの油断のすきにも、違和のウィルスがはいりこみ、からだがこわされてしまいそうであった。しかし歳月をかさねるたびに、しだいになれてきたのだろうか。いつ、そうなったかわからないが、夏でも冬でも見さかいなく風邪をひくようなこともなくなった。とにかく私は、秋の季節に奄美大島の名瀬にやってきたはずなのに、それまでなじんだ季節としての秋を感ずることができなかった。まだ目の底にそして膚の感触に残っていた本土の秋の野山のすがれ行く気配を連続させて感ずることはできなかった。本土の秋の凋落は、しかし冬の試練を堪えさえすればあの輝かしい春のめざめと解放を含んでいる。そ

れはまちがいなくめぐってくるものとしての確かさがあるが、その凋落のない秋をどう過ごし、そして冬が果たしていつどんなかたちでやってくるかがよくわからないために、はじめての名瀬での越年は戦慄に満ちたものであった。

そのとき私の体感したのは、どことなく底の冷えた、しかも真夏の暑熱を装った太陽の光線が、方向の定まらぬ、そしてやむことのない海からの気まぐれな風に、かきまわされている状態であった。

霜がおりず、手のちぢかむことのない奄美のはじめての冬の経験は、やはりかなり異様な冬であったと言わなければならない。オーバーもいらなかったし、火鉢を用意する気持の起きないうちにそれは終わってしまった。だからはじめのころ、私は奄美には秋も冬もないと理解していいのだと思っていた。

二年目の冬から私は寒さがからだにこたえはじめ、三年目には部屋に火鉢をいれ、外出のときにはオーバーを着ける場合さえでてきた。からだが島の気候になじんでくると、私は敏感にその移りかわりに反応をしはじめた。大ざっぱに春と夏に区分してみた名瀬の季節のなかに、まず私は冬を加え入れた。気象統計の記録や数字の上では、もっとも寒い月の二月の平均温度が十四度を上回る結果を示しても、私の体感温度は、はっきり冬を感じつづけ、四月の声をきかなければ安心ができないと、かたくなに思いはじめた。それは言わば本土での季節感とすこしもちがわない。私は、返しの北風を七回やりすごしてから大和旅をせよ、などという島のことわざが耳をはなれなくなった。なんと言っても亜熱帯の場所だから、冬のうちに夏とかわらぬ天気にぶつかることなど珍しくはないけれど、昔の島びとが冬の終わりに、たとえどんなにおだやかな暖かい日がつづいても、いつ荒れた返しの北風が

吹いてくるかわからないから、しんぼう強く何回も時期おくれの北風をやりすごしてから本土に舟旅をしなさいといましめた気持がじかに伝わってくる思いだ。春に重なって長い梅雨があけると南島の強烈な太陽が、いきなり頭上にくらくらと燃えさかるぐあいだが、まわりの緑がうごめく生きものじみて、ふくれあがるエネルギーに満ちた真夏の充実は、私にとっては、ほんのわずかな七月のなかにしか見つけだせないのはどうしたわけか。そして八月にはいるともう、空気の底に、下り坂の夏のくずれを感じてしまうのだ。それは、むかし本土で経験した、日ましにおとろえを示しはじめる八月にはいってからの夏休みの寂寥と、いくらも変わるものではない。

基本的には島も本土のあの行儀のよい四季の移りかわりを踏襲した気象のパターンと重なってしまうのではないかと気づいたときに、私はむしろ失望したことを白状しよう。

鹿児島の南につらなる弧状の島々は、台風常襲地帯だといわれている。私が九年の生活のなかで知り得たこのあたりへの影響の及ぼし方は、本土に上陸したそれの場合とかなりようすがちがうように思えることだ。本土での台風の被害が、死者を出し家屋を崩壊し、無残な爪あとをあらわにのこして走り去るのにくらべると、島でのそれは報道にのせにくいじみな被害のように思う。まず死者をだすことはほとんどないようだ。しかしその被害は、島の人たちの生活の底にひそみはいって、徐々に全身的な衰弱におちいらせているようなものだ。台風はこのあたりに近づくまでは速度がおそく、列島線にたどりつくと急に方向と速度を変えて北上する場合が多いようだが、太平洋の南方海上のどこかに熱帯性低気圧が生まれるとすぐ、島の天候はくずれはじめ、日没のころの空が異様な色彩をあらわ

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo